

## 聖隷歴史資料館

1926（大正15）年4月の復活祭の日、浜松在住のキリスト者の青年有志の者が集まり、社会福祉事業を目的とした“聖隷社”を結成した。当時まったくの無名の若者たちは、“聖隷社クリーニング店”を開設して、このクリーニング店で得る利益で悩める人や弱い人、貧しい人を世話することを目標とした。

その若者たちは、聖なる奴隷となって弟子の足を洗ったイエスに倣う者となるために“聖隷”を立ち上げ、聖隷福祉事業団設立の端緒となった。

1931（昭和6）年、入野村蜷塚（現 浜松市）の松林の中に粗末なバラックの病舎が建てられ、その名をベテルホーム（主の家）と称した。病苦と飢えと迫害に安らぐ所もない悲惨な結核患者を、若きキリスト者たちは、持てるものすべてを投じて病者の善き友とならんと懸命の努力を傾けた。

2002（平成14）年4月に聖隷福祉事業団から聖隷クリストファー大学に移転し、新たにオープンした聖隷歴史資料館の展示室では、地におちた一粒の麦にも似たこの愛の業の歴史を見ることができる。

聖隷歴史資料館の“聖隷の精神と歴史ゾーン”では、聖隷の足跡の黎明期、創業期、激動期、開花期を展示している。1930（昭和5）～37（同12）年の創業期コーナーでは、死病といわれた結核患者を献身的に奉仕したために、迫害を受け続けた苦難の歴史を展示している（写真1）。

“聖隷”という名称は、その歴史を振り返って見ても創立の当初から強烈なメッセージ性を持っている。新約聖書のヨハネによる福音書第13章のキリストが最後の晩餐に先立ち、たらいの水で弟子たちの足を洗い、「あなたがたも互いに足を洗うべきである」と“隷”の道を教えたことにちなんでつけられたとされ、資料館入口正面には、“ペテロの足を洗うキリスト”の絵画が掲げられている。また、聖隷福祉事業団の創立者である長谷川保（1903～94）



写真1 聖隷の歴史コーナー（創業期）



写真2 長谷川保が使用していた聖書

の使用していた聖書も展示されている（写真2）。

聖隷社クリーニング店からスタートした聖隷は、現在、“福祉”“医療”“教育”の分野に枝を伸ばし、葉を繁らせ発展している。そこには、HOLY SERVANT（ホーリー・サーバント）“聖なる僕”を根本理念としているキリスト教福祉社がある。

聖隷の結核療養所で長年にわたり苦労や喜びを共にした患者と看護者がメインのメンバーになりまとめた本「鶯のごとく翼をはりてのぼらん」が2002年4月に公刊されている。当時の聖隷の看護、その根底にある考え方、人間観、死生観が語られており、病むとはどういうことなのか、生きるとはどういうことなのかを深く考えさせられる。

### ■ 参考資料 ■

- 1) 鈴木唯男，他：鶯のごとく翼をはりてのぼらん，聖隷学園キリスト教センター発行（2002）

〔日本放射線技師会 諸澄邦彦〕